



新幹線開業に思う

初代「はやぶさ」は鹿児島行き

私の生まれたころ、日本にまだ新幹線はありませんでした。東海道本線にビジネス特急「こだま」がデビューし、東京・大阪を6時間で結びという「速さ」が話題を呼んだころでした。私は乗ったことはありませんが、家で兄と一緒に、こだま号のおもちゃで遊んでいました。

「こだま」の名称は、一般公募で選ばれました。実は応募で圧倒的に多かったのは「はやぶさ」でした。

「こだま」の応募数は「はやぶさ」の10分の1にも満たなかったそうですが、東京・大阪の往復が日帰りでも可能になったというところで、呼ばばすぐに返ってくる「こだま（はやまびこ）」のイメージに重なることから、採用が決まったといえます。

一方、堂々1位の「はやぶさ」は、なぜか東京と鹿児島を結ぶ特急列車

の名称に使われました。巡り巡って、東北そして北海道新幹線の列車名になるのですから不思議なものです。

現在、東京から鹿児島中央まで新幹線乗り継ぎで所要時間は6時間半ですが、初代「はやぶさ」の時代は、ほぼ丸1日かかりました。それでも「はやぶさ」だったので。

幼稚園に上がるころ「夢の超特急」が登場して、東京・大阪がわずか3時間10分（※）になった」と日本中が沸きました。「夢の超特急」とは当時、新幹線の代名詞としてよく使われた言葉です。開業は東京オリンピックの開幕に合わせた昭和39（1964）年10月1日。まさに「戦後の復興」という夢が、1つ1つかたちになっていった時期でした。

われわれ兄弟も、新幹線「ひかり」のおもちゃを買いつけられ、「こだま」から「ひかり」に乗り換えたことを鮮明に記憶しています。

※東海道新幹線開業当初は、安全性担保のため速度を抑え、東京・新大阪間を4時間で走っていました。当時は「ひのみ」が登場する前で、最速列車は「ひかり」でした。

似て非なる当時と現在

新幹線にオリンピック。地域や国

の発展に期する思いは、半世紀前と似ています。

しかし当時のオリンピックは「参加することに意義がある」と言われたアマチュアスポーツの祭典。今やそれが、プロの参加は当たり前、活躍する選手は小学生のころから海外でトレーニングを積んでいるといった状況で、隔世の感が否めません。

そして新幹線ですが、「太平洋ベルト地帯」とも呼ばれた日本の中枢、東京・大阪間に開業してから半世紀も経て、これほど世の中が変わってようやく、北海道では、入口にすぎない新函館北斗に到達しました。新幹線が通じて嬉しい反面、中央とのあまりに大きな時間差に、改めて驚かされてしまいます。

地元のための新幹線

新聞を読んだり、人の話を聴いたりする中で、新幹線への期待としては、「来函観光客の増加」がいちばんのよい印象を受けます。

さすが観光都市ではありませんが、地元的全員が観光業に携わっているわけではありません。普通の市民としては、出張や結婚式、同窓会その他で東京方面へ行く足として、新幹線がいかに利便性を提供してくれる



かが気になるころだと思えます。その意味では新幹線のおかげで、日帰りでの東京滞在時間が格段に長くなったのは、ありがたいことです。

欲を言えば、新幹線効果により、企業の進出が増えることを期待します。雇用が拡大し、所得も上昇していけば、よい意味で観光業への依存度が減り、逆に市民が旅に出かける余裕も増えるはず。私としては、観光客に来てもらうより、自分たちが新幹線で出かけた方がずっと楽しいと思うのです。

★プロフィール★

おおにし つよし
大西 剛さん

1959年生まれ、大阪出身。
2011年秋より函館に移住し、「新函館ライブラリ」を設立。「新函館写真紀行」「市電でめぐる函館100選」など函館本の出版に取り組む。新幹線開業に合わせ「来たくなったら自分で探そうー超不親切 移住者による函館ガイド」を緊急出版。